

補習クラス

集中力を高めるための工夫

レバノンの難民キャンプでの補習クラスは 2003年に始まり、現地で定着してきました。現在7箇所のキャンプで900人の子どもが参加しています。4月には、プログラムを支えているスタッフの知識や能力向上のため心理サポート研修を実施しました。臨床心理士・筑波大学研究員の原口英之さんに、研修の講師として難民キャンプで研修指導をしてもらいました。また7月にはアートワークショップを「パレスチナ・ハートアート（代表・上條陽子さん）」のご協力で開きました。

心理サポート研修

春研修のテーマは学習困難、集中力不足、心理的な問題を抱える子どもたちへの対応、集中力向上につながる教材、先生の行動、教室レイアウトの工夫などです。

難民キャンプに住む多くの子ども達の集中力は低く、長持ちしません。日常的な停電、貧困生活、レベルの高いレバノンの教育カリキュラム、学校や家庭での体罰などが原因です。勉強に集中できず、授業についていけなくなると学校が面白くなり、努力を放棄してしまいます。また集中力に欠ける子どもたちは、クラスでは他の子どもたちの邪魔をしてしまい、少人数で行う補習クラスでも授業が進まなくなってしまうことが多いのです。しかし指導員やソーシ

ャルワーカーのちょっとした工夫や活動は、子どもたちの集中力を向上させ、興味や関心をひきつけることができます。参加者にそれを意識してもらうことが研修の目的です。

原口さんから、まるでゲームをしているような感覚で学習できるテクニックが紹介されました。特に好評だったのが「静かにカード」と「リーディング・チェア」。生徒がうるさい時に先生は何も言わず、ただ「静かに」と書かれたカードをみんなに見えるように持ちます。子どもたちは先生の行動が気になり徐々に静かになるという仕組み。叱ったり怒鳴ったりも不要で子どもの集中力を上げる1つのテクニックです。

「リーディング・チェア」は、子どもたちが飽きないようにする方法

の1つです。先生の代わりに、子どもが教室の前に座りみんなに向かって、教科書や問題を読みます。皆の前で読むので集中力も上る、と学習面でも心理面でも効果があります。研修後のキャンプ訪問では、新しいアイデアが早速活用されていました。

体験参加型の研修では、日本の学校でも使用しているゲームなどを実際やってもらいました。新人もいて初対面のスタッフも多かったのですが、一緒に参加して、意見や情報交換をしたことで、参加者の間の繋がりが強まったことが感じられました。

現場で既に取り入れられていた学習方法、遊びや企画、教室の飾り方などに原口さんは感心していました。日本の学習カウンセラーや臨床心理士の間でよく知られる教室での指導テクニックにとっても似ている工夫を現地では既に使っていたのです。スタッフの経験や想像力・創造性に感銘を受けたそうです。狙いや学習的・心理的效果をきちんと把握していない場合には原口さんが丁寧に解説してくれたので、今後に期待が高まりました。

写真:

北海道の小学生たちが「街」を半分描いた10メートルの作品は、パレスチナの子どもたちが残りを描いて完成させました。(7月・アートワークショップで)

